

新のおとし子

1990年2月 (題字・藤馬龍太郎筆)

発行

同志社大学法学部
「藤馬会」事務局

☎(07437)4-4816

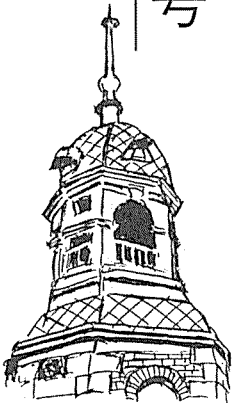
創刊号

藤馬会の会報「龍のおとし子」が創刊されるということ、私にも一文を——という編集子の注文です。うれいこと、そして感慨無量でもあります。思い起こすと、私が母校に帰って比較憲法を講ずることになりましたのは一九六八年四月。約二十年勤務した国立国会図書館での立法調査というやり甲斐のある仕事をなげうって、母校の後輩諸君の勉学のお手伝いをして、熱い思いを抱いて転身した年齢、四十歳の春でした。

しかし、同志社に帰ってみますと、既に全国を席捲しつつあった大学紛争の兆しがここにも及び、風雲急を告げる疾風怒濤の時代の到来を思わせる陰しい雰囲気がかんぱすを支配していることを肌身で感じたとき、私は東京を去った。

創刊号

祝



クラーク館

スウェーデンで思う

ストックホルム在住

田中 美穂

私がここストックホルムに来たのは七月の下旬。いくらスウェーデンといえども、まだ夏の名残があり、かなり暑かったことを記憶しています。今は少しずつ冬の向かい、マイナス二〇度の極寒の冬を待つばかりです。

ここで何故私が今ストック

たことをいたく後悔したことでした。キャンパスはヘルメット学生のデモとシュプレヒコールで騒然とし、講義も声を張り上げる始末でした。明徳館五階にあった研究室は「封鎖」と称してヘルメット学生によって不法占拠されて、彼ら(彼女ら?)の個室と化し、遂に教室はもろろんのこと、学内立ち入りもままならず、

語り尽くせぬ22年の歩み

同志社大学
法学部教授 藤馬龍太郎

校門は見苦しく閉ざれて、出入りも封鎖学生の許しなしでは不可能というあり様でした。仕方なくゼミは琵琶湖畔・膳所の拙宅の狭い部屋に重なりあうようにして行なったこともしばしばでした。授業も寺町通りの寺院の本堂などを借りて行われたものでした。私は何のために京都に帰ってきたのだろう、と悩んだこともありました。しかし、今考えてみても、あの当時の熱い思いがゼミナールの雰囲気にはピアニソンのようにピンと張りつめた緊張感があつたように思っています。あれから二十歳の歳月が流れました。私のゼミナ-

クホルムに在るのかについて簡単に書きたいと思えます。私はアイセック(国際経済商学学生協会)というサークルに所属、研修生交換プログラムに参加し、スウェーデンの会社で八カ月間だけ働くチャンスが得られたわけですが、会社では、顧客のニーズを調査したり「日本のビジネスマンとのうまいつきあい方」などに

ついて、主にレポートを作成するというのが、私の仕事です。仕事を通じて会社の人や、ほかのスウェーデンの会社の人たちと会い、話が出来ることや研修生仲間とお互いの国情について話し合ったりすることは言葉では言い表せないほど貴重な体験です。

スウェーデンは日本よりも男女平等が進んでいます。男の人よりも女の方が強いような気がします。街の中では地下鉄、バスの運



藤馬会での藤馬教授ご夫妻
(1989年2月、新島会館)

れしい限りです。今、私は、かつて感じた後悔の念どころか、同志社で巡り逢った皆さんとの出会いに感謝し、これからもこのきずなを大切にしていきたいと願っています。

私の好きな言葉の一つ「遇無空過者」(あうて空しく過ぐる者なし)。数年前に、卒業生の皆さんのご好意とご協力のもと「馬会」が年を追って盛大に催され、北は札幌、南は鹿児島からと馳せ参じて頂いています。これも役員さんたちによる献身的なご配慮と、会員の皆様のご厚情とご協力の賜物であると深く感謝しております。藤馬ゼミに参加したという連帯感のもとに、先輩と後輩とがお互いに旧交を温め合い、交流し合う場として、そしてまた、後輩の現役学生にとつては、経験豊かな先輩に就職問題や公務員試験などの進路について相談したり、指導を受ける場として「藤馬会」が、今後ますます発展して行くよう、心から願っているところです。

転手、ボディガードとして働いている女の人たちをよく見かけます。共働きや日本という「内縁関係」の人たちにもスウェーデンの社会は寛大な社会制度を設けています。また、イラン、トルコからの亡命者、韓国から里子に出された若者などスウェーデンの様々な側面を知ることができました。これからまだ三月末までの私の研修は続きます。法学部生としては少し道にそれたことをしている私ですが、

あなたも公務員に

名古屋市役所

川原田 真弓

早いもので大学を卒業し

て三年半が過ぎ、京都に二年も行っていいなと思っていたところ、原稿のご指名をいただき、拙文ではありますが「公務員を目指す方へ」ということで、思いつくまに書かせていただきます。

公務員と言いますと、腕カバをして、区役所の窓口で住民票のコピーなどしているイメージがありますが、実に様々な職場があり、思いのほか面白い職業です。美術館、図書館、スポーツセンターなどの市民利用施設、老人や子供のための社会福祉施設、私自身も最初の三年間は公民館に勤務しました。半面、日祝日出勤、夜勤もあります。市役所、区役所以外はほとんど不規則勤務ではないかと思えます。市民サービス、福祉の要求の強い現代では、一層仕事に幅が出てくると思われまふ。面白いもので、初めは口先だけで「市民のため」と言っていたのが、時に本気になり、利益を追求しないぶん、純粹に取り組めるような気もします。自分の街を良くしていきたいという方、公務員を考えてみてください。また、女性にとつては、いい職業だろうと思います。賃金をはじめ、制度上は男女平等です。職員の意識は案外保守的ですが、社会進出を目指す女性の方は是非考えてみてください。

最後になりましたが、幹事の方のご尽力に感謝し、藤馬会の発展を心からお祈り申し上げます。
(82年度生)

十分楽しんだ4年間

夫 あれから17年 妻

卒業式後の映画鑑賞

中塚製菓

中塚 康文

私は十七年前に藤馬ゼミを家内とともに卒業した第三回卒業生です。まず当時

を振り返って見ますと、先生はお若く、髪も黒々としておられました。キャンパスで先生と立ち話をしていると、友人が通りすがり「おい中塚、マージャンへ行かへんか。おい、おまえもどうや（先生に向って）」慌てて友人に教授であることを告げたことが懐かし

思い出されます。三回生のゼミ旅行は梅池へスキー。四回生の時は伊豆。猪料理を食べ、ハイキングの好きな先生に伊豆の踊り子コースを、ただただ歩かされたのを覚えております。花背へ飯ごう炊飯に行ったり。学生生活を十分に楽し

み、元来、勉強嫌いな私は遊んだ記憶しか残っておりません。当時の先生は、酒も飲まず、煙草も吸われず、競馬など賭け事もされず（私はよく淀の競馬場へ行きました）何を楽しみにしていたらつしやるのかと、秘かに心配？をしておりました。一昨年秋、ゼミ旅行で鹿児島へお越しになりました折、本人がおつしやるには、少々飲まれるとのこと、顔が良い色になっておられびつくりしました。翌日、少しですが市内を案内させて頂き、先生の律儀さ、礼儀正しさに触れ、良い先生に教えを受けたのだなあーとこの歳になり感じました。

さて、近況ですが、鹿児島に帰り、親の仕事を引き継ぎ、菓子卸売業を営んでおります。メーカーと小売店とに挟まれた厳しい業界ですが、郷土の同志社卒業生に助けられながら、頑張っております。今度、NHKの大河ドラマ「翔ぶが如く」の舞台に決まり、鹿児島に観光に来られる方々も多くなると思っています。来鹿の際は是非、お寄り頂きますようお願いしております。当地の土産には、どちらも社長が同志社出身であります焼酎「小鶴」と明石屋の「かるかん」をよろしく。来鹿大歓迎。連絡待っています。（69年度生）



忘れられぬゼミ



▲4回生
浜松

ゼミ旅行

▼3回生
信州



法学部屈指の大所帯

ゼミ旅行で培ったきずな

3回生

現在の藤馬ゼミ三回生は、男三十二人、女九人の計四十一人。法学部の中では屈指の大所帯。ほとんどが二回生の法学演習からの仲間、藤馬先生の人格とゼミ全体の雰囲気にかき立てられてきた連中です。学業に身の入らない点を時々、

九月二十四日に京都を出発。長野県の諏訪湖畔に宿をとり、白樺湖、八島高原、蓼科高原、妻籠宿と秋の風に誘われるままにバスに揺られました。全員で旅行をするのは初めて。大所帯ゼミの唯一の弱点ともいえる学生相互の腹を割った付き

合の現となり。おしかりの言葉をたまわることも度々ですが、一二年間のゼミ生活を過ごすなかで、そろそろ落ち着きが出てきたかな？と思う今日頃です。そんな我々が、二泊三日のゼミ旅行へ出かけました。

九月二十四日に京都を出発。長野県の諏訪湖畔に宿をとり、白樺湖、八島高原、蓼科高原、妻籠宿と秋の風に誘われるままにバスに揺られました。全員で旅行をするのは初めて。大所帯ゼミの唯一の弱点ともいえる学生相互の腹を割った付き

九月二十四日に京都を出発。長野県の諏訪湖畔に宿をとり、白樺湖、八島高原、蓼科高原、妻籠宿と秋の風に誘われるままにバスに揺られました。全員で旅行をするのは初めて。大所帯ゼミの唯一の弱点ともいえる学生相互の腹を割った付き

九月二十四日に京都を出発。長野県の諏訪湖畔に宿をとり、白樺湖、八島高原、蓼科高原、妻籠宿と秋の風に誘われるままにバスに揺られました。全員で旅行をするのは初めて。大所帯ゼミの唯一の弱点ともいえる学生相互の腹を割った付き

大学生も残りわずか。教授を囲んで記念のポーズ(4回生)



中塚 洋子

藤馬会の皆様に主人とバトンタッチしてひと言だけ。私の旧姓は長束です。希望者は全入という安易な理由で、藤馬ゼミに入れていたのだという出来事一員でした。主人が書き残した沢山の思い出のほかに、卒業式当日、先生とゼミの女性だけで、マックイーンの映画「ゲッタウェイ」を見に行った覚えがあります。男性はマージャンをして、その後集まって祝杯を上げました。あれから十七年。今は四人の子供も中学二人、小学生二人に育ち、時の流れを感じております。(69年度生)

各界で活躍600人

失いたくない憲法感覚

毎日新聞阪神支局

武政 和則

藤馬ゼミの悲願として何度か試みながら見果てぬ夢となっていた名簿編さんが、めでたく成就されたことに、まず、心から敬意と謝意を表します。何のお手伝いもしませんでした私が「職種が重ならないように」との人選から、厚かましくもこのような晴れがましい紙上に拙文を寄せる破目になりました。「さて何を書いたらよいものか」と悩んでいると、いつしか頭の中には

長らく思い出すことがなかった学生時代のあれこれが、まるで本棚の片隅で眠っていた絵本を久し振りに手に取って一頁一頁丹念にめくっていくように浮かんでは消え、時がたつのを忘れてしまっています。

一夜漬けでの学説や判例の書き写し。ゼミの仲間と待ち合わせて明徳館二階の時代遅れの印刷機とにらみ合い、四隅がずれないように気を使いながら一枚一枚作り上げたレジュメの、湿り気を含んだ頼りない手ざり

・メーカー	18
・公務員	10
・金融	5
・運輸	3
・情報処理	2
・電力・ガス	2
・証券・保険	2
・商社	2
・通信	1
・建設	1
・サービス	1

長いようで短かった大学生生活も今まさに終わろうとしています。その中で最大の関心事は、やはり就職でしょう。そこで今年の就職状況を説明したいと思います。

わがゼミは公務員志望が多いのが特色で、伝統にもなっています。今年も十人(約二〇%)が公務員への道を開きました。これでも

伝統の公務員志望 民間大手にも進出

4回生の就職状況

ピークを迎え、これを見たメーカーや他の業種が後を追う形で動き、実際にはかなりの学生が七月中、遅くとも八月中旬までに数社から内々定。訪問解禁の八月二十日以後も活動を続けた学生は少数派です。ある程度予想されたことでしたが、

約一七%と非常に少なくなっています。これは昨年、民間企業へ就職した文系学生の二七%が金融関係であったことと比較するとよくわかります。原因がどこにあるのかわかりませんが、昨年と比較すると同じぐらいであることから、ここ最

当初の希望者数よりもかなり減りました。内訳は国家一種(法務省)一人、外務省専門職二人、国家二種三人、それに京都市や京都府などの地方公務員が四人と健闘が目立ちました。一方、民間企業は好景気の追い風に乘って史上空前の売り手市場。就職協定はますます有名無実化。企業側の採用活動は、七月一日〜三日に

藤馬会が産声を上げた1987年2月7日の発足セレモニーに参加したみなさん（京都全日空ホテル）



藤馬会会報の創刊に当たり、一言お祝いの言葉を述べさせていただきます。この度、事務局の皆様のご努

会報で交流 北から南から

藤馬会 会長 岡本良晴

力により会報が創刊されることになり、誠にめでとうございます。会員の皆様には北海道から九州まで日本全国で御活躍されておられますが、年に一度の総会

に必ずしも御出席戴けるわけでもありません。同じ会員でありながらお顔も存じあげない方々が大勢おられ、問題があります。我々は藤

「和」。我々の住むさと（郷、職場、家庭、学校）に一人の争うものもなく、互いに手を取って明るい社会を作りましょう。和を作るためにこの会報が一助となることを心からお願ひして私の祝辞と致します。最後にになりましたが、会報の創刊に際して御努力をいただきました事務局の皆様にお礼申し上げます。（66年度生）

自立するということ

参議院事務局

岡田 真実

私が大学を卒業し社会人となって早いものでもう半年。何だか足が地に着かず、文字通り夢の様に過ぎてしまった。社会人一年生とな

に言えばその名に値する程の内容とはいえないが」と仕事はうまく両立できている。かくして何とか順調に生活を送っており、自立しているという自負から、自分なりに充実した日々を送っているつもりであった。ところが先日、東京に新しくできたホールにコンサート

には充実しているが、その内容は実に空虚な日々を送っていたといえるのではないか。世の中には、ある一定方向に強い流れがある。気づかないうちに私は完全にその流れに飲まれ、流されていたのだらう。その証拠にこの半年間に私が読んだ本は十冊足らず、観た映画も五本に満たず貧しいばかり。以前なら一カ月に相当する分量だ。流れに乗ってしま

私が高今までに出会った魅力的な人達は皆、様々なことに興味を持ち、素養豊かでエネルギーに満ち、自らの足でしっかりと立っていた。私は彼らを友とするのに大変な誇りを感じる。そしてまた、私自身も彼らに比べて、そういう存在でありたいと思つてやまない。自立するというのは、単に日々の責務をこなすことではない。自らの足でしっかりと立つて、いかに内容豊かな生き方をするか、自分という人間をどこまで高めてゆけるかであると思う。昨日に比べて今日の自分は違うということがはつきりわかる程、一生懸命、一日一日を生きたい。（85年度生）

事務局だより

藤馬会の恒久的発展と事務処理の円滑化のため、現役生と役員により、事務局を設置しました。事務局として窓口を設けることで会員の情報が相互に、出来るだけ早く正確に伝わる体制づくりを目指しています。本年は会報の創刊と同窓会の基本となる会員の名簿

を作成いたしました。（不明の項が多いため、ご存知のことがあれば、事務局までご連絡下さい）

（70年度生 井上 守）

人一倍その感が強い。初めて親元を離れて自活を始め、今までの自分が精神的にも経済的にも他人に依存して生きてきたかを初めて思い知らされた。毎日、満員電車で揺られて通勤し、家へ帰れば家事が待っている。とにかく自分が動かないことには何も片付かない。経済面にも自分の給料ですべてを賄うのだから、無計画には使えない。自分の生活に伴う責任は全部自分で負わねばならない。これはなかなか大変なこと。初めのうちは、まさに日々の生活に追われているという感じであった。最近やっと要領が良くなり、家事（正直

の半分の間、極度に無感動になっていたことである。様々なことに興味を持って見る聴く、知ろうとするのにエネルギーを費してこそ、その興味の対象から大いなる感動が得られ、それがその人の素養となる。また、そこから新たなエネルギーが生まれ、人は成長し発展してゆくのだと思う。私はこの半年間はただ生活するのに精一杯で、以前なら興味を持ったであろうことにも無関心になり、時間的

かつ大変なエネルギーを要し、障害も多い。でもそこには絶えず流れに埋没するまいとする激しい自己主張とエネルギーが生まれ、やがてはその流れを変えることもあるだろう。そうしてこそ、社会全体が身近なところで自らの属する組織自体が、成長し発展してゆくのだと思う。

新聞記者生活も十六年目。会報の創刊に際して、事務局の同期生から編集を任せられました。十六年間のうち、五年間、新聞の見出しやレイアウトを担当する整理部にも在籍していた経験から二つ返事でOKした次第です。

ところが、現在は運動部で広島カープ担当。シーズオフも宮崎県・日南市でのキャンプや年末、年始用原稿の取材、執筆に追われなかなか会報の編集作業にまで手が回らず、事務局をヤキモキさせたようです。当初二ページの予定でしたが、原稿が多く、二倍のページ数になりました。私の一存で原稿の削りをはじめ、見出しや扱いも決めました。いろいろ批判もあると思いますが、創刊号ということに免じてお許し下さい。会報は原則として年一回の発行を計画しています。みなさんの原稿、写真、イラストなどバラエティーに豊んだ投稿をお願いします。（70年度生 井上 守）

編集後記

新のおとし